

ふるさと探訪の旅

東京板倉会 会長 清水忠志

新緑が目にあざやかな五月、東京板倉会二〇周年記念ふるさと探訪の旅「聖岩窟と丈の山・山寺薬師を散策できる道造り活動」をたずねてが行われた。東京板倉会と地元板倉との交流を深めて行きたい、古里へ形ある動きをしようではないか、会員の意見がかねてより有り、それが「花企画」としてまとめられていた。本年度東京板倉会発会二〇周年を迎えるにあたり実行されたものである。

JR信越本線新井駅前十一時四十分集合。送迎バスでやすらぎ荘着。長寿膳の昼食後午後一時半山寺薬師着。「聖岩窟（通称ひじりいわ）」と丈の山・山寺薬師を散策できる道造り活動」をすすめている「寺野の歴史を語る会」メンバー十二名の方々の先導で、丈の山山頂へ向かった。雑木のある傾斜地を一行になって登り始める。

快晴とは言え藪の中の道はまだまだ滑るし、小さい木の枝や根つ子にしがみつくなり、更には仲間の手と手を引っ張りようやく頂上、早い人は二十分後が四十分程かかっていた。

頸城平野が目の前に広がり、妙高山、南葉山遠くは直江津港から日本海に浮かぶ佐渡ヶ島まで見通せる。そこには戒壇の跡と言われる一段高い五間（九咫）四方の仏教遺跡がのこっていた。予め用意して頂いた「ヤマボウシ」それぞれ名札を吊るしい場所を捜して植樹、記念撮影。これから毎年えられるか。五年後十年後、それぞれに愛着の籠もる一五本の木、成長が楽しみなところである。

丈の山にまつわる山寺薬師と聖岩窟（ひじりいわ）について記してみたい。山寺薬師は遠く、一三〇〇年前の昔、白雉（は

くち）年間（六五〇～六五四、高徳天皇の御世）に僧阿果が修験道的な山岳仏教の先達として丈の山（たけのやま）を開創したと謂われ、以来行基、裸形、紀躬高等の名僧知識にまつわる古典伝承で山寺三千坊の名蹟としてうたわれてきた。

その後加賀の国の濁世の争乱、鎌倉に敵した為などによる兵燹（せん）にかかり仏蹟（ぶつざく）ごとく灰燼に帰したとされる。（山寺薬師奉讃会由来より）

毎年五月八日がお薬師さまの縁日、近郊の人々で賑やかとなっていた。建っているお寺の中央に薬師如来、左に釈迦如来、右に阿弥陀如来の大きな三尊仏が鎮座する。それぞれに手を合わせてお参りする。

聖岩窟は天平年間（七二九～七四八、聖武天皇の御世）紀州の人裸形上人が、山岳仏教修業のためにこの地に来て、岩窟で修業したのはじまりで、後に山寺三千坊五山八十一家七堂伽藍続々建立した時代にも修験者達が修業したと伝えられている。山寺薬師の背後にそびえる丈の山を信仰の対象にした適地である。頸城平野が一望に開け、日本海、遥かに佐渡ヶ島を望む絶景の地である。後世には親鸞恵信尼の三男信蓮坊修業の地と伝承されている。多年の天災風雪によって前方入口はくずれているが修行者、修験者、そして信蓮坊が不断念仏を行じた処の暦年の古

さをしのぶ面影をのこしている。岩窟の広さは畳敷数枚あつて床は平で十人程度座れるようになっていて、聖の岩窟（ひじり）のいわやと称している。（寺野郷土誌）この丈の山周辺がかつて山岳仏教の一中心地であり子供の頃比較山と似ている山と聞かされていたことが思い出さされる。

午後三時三十分、お薬師駐車場から車で十分、地すべり資料館に集まって、「丈の山散策道造りの取り組み説明」、地元伝わる「猿供養寺物語」と人柱伝説の講演会が企画されていた。板倉区の中山間地域は、大のけ「地すべり地帯として知られ、幾多の伝説も語り継がれている。眞田広信歴史研究会代表のお話し等」に聞き入った。地すべり資料館内部の見学と、人柱供養堂の参拝後徒歩でやすらぎ荘へ。

同六時交流会には地元から、旧板倉町瀧澤純一町長、増村彬町つくり振興会長、三浦栄一寺野の歴史を語る会代表世話人他二十名の方々が揃われる。総勢三十五名、古里は何年経ってもいいものだ、和気あいあいとすすめられる。翌日は朝早く七時半朝食、八時半に出発して、ヨシ八池、光が原、稲増中村十作記念館とまわる。十一時の餅つき大会、山菜まつりに遅れないうち大急ぎで帰郷する。

新潟日報五月三十日付では「古里の友と植樹に汗、首都圏から板倉出身者、上越市板倉区で二十六・二十七の両日、首都圏で暮らす同区出身者と地元住民の交流会が開かれた。参加者の中にはかつての同級生も多く、一緒に山に登って記念の植樹をしたり、地域の伝説について話しを聞いた。一行は、「寺野の」メンバーが整備している地元の山、丈の山の散策道を汗だくになって登り、頂上に名札をつけたヤマボウシを記念植樹した。その後、近くの「地すべり資料館」で地域に伝わる伝説の話を聞き、懇親会では、昔のニックネームを呼び合い、思い出話で盛り上がった。」と報道されていた。

そこで地元の方々の活躍、誠意に触れ、ふるさと探訪の旅では大変お世話になった。関係各位に厚く御礼申し上げたい。古里へ形ある動きをしたい。その具体化する一歩であったと確信している。

(東京板倉会事務局長 市村喜幸 記)

